

～支部事務局のご案内～

北海道医療ソーシャルワーカー協会は9つの支部によって構成されています。詳しくはお近くの各支部事務局へお問い合わせ下さい。

【札幌支部連絡協議会】

〒060-0001
札幌市中央区北1条西9丁目
リンクージュプラザ4F
TEL・FAX
011-261-7151

●札幌の各支部連絡先

・中央A支部(南区・豊平区)

〒062-0034
札幌市豊平区西岡4条4丁目
1-5
老健 アメニティ西岡
支援相談課内
TEL 011-854-5510
FAX 011-854-3425

・中央B支部(北区・中央区・石狩など)

〒060-0062
札幌市中央区南2条西19丁目
同交会病院 医療相談室内
TEL 011-611-9131
FAX 011-621-4537

・中央C支部(白石区・東区)

〒065-8611
札幌市東区北12条東3丁目
3-31
天使病院
TEL 011-711-0101
FAX 011-751-1708

・中央D支部(厚別区・清田区・北広島・江別・恵庭・千歳など)

〒068-0030
岩見沢市10条西21丁目2番地
老健 北翔館 支援相談室内
TEL 0126-32-2177
FAX 0126-32-2150

・中央E支部(西区・手稲区・小樽・倶知安・岩内・余市など)

〒063-0811
札幌市西区琴似1条5丁目1-1
静和記念病院 医療相談室内
TEL 011-611-1111
FAX 011-631-6271

【日胆支部】(室蘭・登別・伊達・苫小牧・洞爺・白老・浦河など)

〒050-0076
室蘭市知利別町1丁目45番地
新日鐵室蘭総合病院
医療福祉相談室内
TEL・FAX (直通)
0143-47-4337

【南支部】(函館・八雲・瀬棚など)

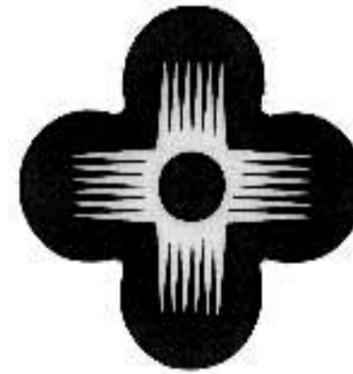
〒042-8678
函館市湯の川町1丁目31-1
函館渡辺病院 医療福祉課内
TEL・FAX (直通)
0138-59-4198

【東支部】(釧路・帯広・根室など)

〒085-0007
釧路市堀川町8番43号
老人介護支援センター
ひまわり内
TEL 0154-24-2133
FAX 0154-23-7665

【北支部】(旭川・富良野・北見・網走・紋別・稚内・滝川など)

〒070-0032
旭川市2条通3丁目94番地
旭川2・3ビル1F
株式会社
ジャパンケアサービス
ハッピー旭川
TEL 0166-27-3811
FAX 0166-20-4505



第18号

平成16年7月25日発行

ぱぶりけーしょん

事務局 北海道医療ソーシャルワーカー協会
北祐会神経内科病院 医療福祉部内
札幌市西区二十四軒2条2丁目4-30
<http://sar-jp.com/msw/>

巻頭言・高次脳機能障害者の支援とMSWについて

時計台病院 名誉院長 大島 峻

平成13年度から15年度までの3年間、「高次脳機能障害者社会復帰支援モデル事業」が、北海道と札幌市を含めた全国12ヶ所の実施主体(15自治体)において実施された。北海道では地方拠点病院として北大病院が、社会復帰施設としてリハビリテーションハウス手稲と小規模作業所「コロポックル」が指定され、実態調査と33件の症例登録が行われた。

この結果、①診断基準の策定、②標準的治療プログラムの作成と医療サービスの提供、③福祉サービスの提供などについて検討・提言され、北海道では「北海道障害者基本計画」の中に高次脳機能障害への対応が追加され、平成16・17年度にもモデル事業を継続し対応手法の検証・改良を実施することになった。特に支援体制の整備として高次脳機能障害支援コーディネーターの育成・活用の重要性が強調されている。

支援コーディネーターは“それぞれのケースについて支援計画の策定や支援の実施について継続的に調整する者”とされ、各地区の特色や実情に合わせた支援ネットワークに応じて調整を進める必要がある。神奈川県や名古屋市では自治体立のリハビリセンターを中心に組織的な取り組みが行われているが、リハビリセンターがない北海道では、地域リ

ハビリ支援体制(北海道リハビリ支援センターとして平成15年度に北海道総合在宅ケア事業団と札幌医大が指定された)と協力しながらこれを活用し、独自の支援コーディネーター制度を育てていく必要がある。

このコーディネーターにはMSWのほか、医師、看護師、臨床心理士、生活指導員などが想定されているが、何よりも大切なことは早期の適切な対応であり、広い北海道ではフットワークの良さが求められている。わが国では介護保険が始まってから、高齢者や痴呆老人に対して適切な対応ができる専門職は著しく増加したが、高次脳機能障害に関して専門的な知識があり対応が出来る人(支援コーディネーター)は非常に少ない。数を増やす努力はもちろん必要であるが、少ない専門職を有効に生かすためには、職域を越えたお出かけサービスが是非とも必要であると考えている。

MSWの中から高次脳機能障害に強い人(支援コーディネーター)が生まれ、地域リハビリ広域支援センターの講師バンクに登録され、職種間で指導的役割を発揮してくれると同時に地域での人材派遣にも協力していただける(フットワーク)事を期待している。

“高次脳機能障害者のソーシャルワーク援助”

—私たちはスーパーマン！！—

北海道大学病院 リハビリテーション部 小西利千子



—「私たちスーパーマンでない」—

厚生労働省が実施している高次脳機能障害モデル事業の支援コーディネーターとして採用されて3ヶ月がたちました。まだ自分が何をどうしていったら良いのか、わからないというのが正直なところですが、ソーシャルワーカーに対する期待の大きさは就職した日から感じています。

モデル事業を行っている大阪府が行ったアンケート調査の結果が手元に届き、目を通して私が思わずつぶやいた言葉は「私たちスーパーマンでない」でした。

「ソーシャルワーカーの知識が浅く一般的だった」「ソーシャルワーカーの勉強不足、理解不足、知識不足」などと手厳しく、私にはケースの前で一生懸命対応していたであろう仲間の姿が目には浮かびました。が、どんなに一生懸命であろうと、患者さんや家族の期待にこたえなければ一般的な対応＝期待はずれの対応に終わってしまいます。

—私たちソーシャルワーカーに求められるもの—

私が着任して程なくお会いしたのは、十数年来「高次脳機能障害」の患者さんをみてきたご家族でした。

それまで出会ったソーシャルワーカーや行政の人たちも熱心に相談に乗ってくれました。が、何か釈然としないものがあり、いつも何か胸につかえが残っている気がしていたといいます。

私は初めての面接でもあったのでとにかく家族のお話に耳を傾けました。その上で、やっと最近「高次脳機能障害」が障害として取り上げられてきたこと、がまだまだ(矛盾した言い方だが)障害が理解されていないこと、それゆえこの障害に対する制度などが整備されていないことなどを説明しました。

そこでご家族も十数年前何の説明も対応もされなかったこと、どこへ行ってもあっちこっちと回されて「難しいね」と言われたことがやっとわかったと言っ

てくださいました。

私たちはケースを目の前にするとどうしても要求を先取りして、これにはこれをと制度の当てはめをしていることがないでしょうか？自分(ソーシャルワーカー)はわかっているのに、だから「難しい」と言ってしまうけれど、経過を知らない患者さんや家族はなんだかわからない、となってしまう。

私たちソーシャルワーカーに求められるのは、高次脳機能障害の患者さんに限らず言えることです。まずゆっくり話に耳を傾けることだと考えます。何か形になるものを示そうとあせらなくて良いです。手帳の取得や年金の受給援助は大切なことですが、「どうしてこんなことになったんだろう」と、思い悩み、これからどうしようと真剣に考えている患者さんや家族の話聞いて受け止めてください。もちろん傾聴し共感だけでは聞き上手に終わってしまいます。

が、そこから援助が始まります。この間高次脳機能障害の患者さん、ご家族が一様に言うのは「この病気を理解してもらえない」という言葉です。一人一人違う障害を理解し、その上で必要な援助はないか、活用する援助がないときはわかりやすく説明しごまかさなないことです。

もし、ソーシャルワーカー自身が高次脳機能障害についてわからなければ一緒に学習しましょう。

—空を飛べないスーパーマン—

いくら私たちソーシャルワーカーが受け入れようががんばってみても、職場内の同意や理解を得られないと受け入れることはできません。自分が知った情報や現状をどうか周りに広めてください。私たちの援助を必要とし期待している患者、家族は私たちが思っている以上に周りにたくさんいます。

私たちは空を飛べないし、変身もできないけれど、求められるのならスーパーマンにならなくてはいけないのかもしれない。

高次脳機能障害への MSW としての理解・支援

高橋脳神経外科病院 永石信介



私を含め高次脳機能障害という病気を、実はとても曖昧に受け止めていたところがあります。そのため北海道医療ソーシャルワーカー協会の医療福祉活動部による呼びかけにより、高次脳機能障害者への支援について考える部会が発足、これはと思い参加をいたしました、私は脳神経外科病院勤務ということでもあり、自分自身が少しでもこの高次脳機能障害について理解し、今後よりよい情報の提供・援助につなげていければと思うところでもあります。

今回この部会が活動するに当たり、MSW 立場から果たす役割について述べたいと思います。

まず高次脳機能障害とは、病気や事故によって脳に損傷を受け、認知機能障害や情動障害のため、社会に適應できない障害者を総称して「高次脳機能障害者」といいます。特に近年事故の増加と医療の進歩により、生還する人が増加しています。生還者の中には高次脳機能障害者が大勢いるのが現状です。

しかし、MSW の中でも高次脳機能障害という病気については聞いたことはあっても、その発生原因・障害による問題や対処・対応方法については理解されにくい事もあります。

この状況では、MSW として高次脳機能障害について理解している人、聞いたことはあるがよく知らない、わからないなどの個人差が生まれてしまい、知らないということにより、高次脳機能障害者への適切な援助ができないなどにつながりかねないのも現実としてあるのです。

これにより弊害が生じては、そこに暮らす高次脳機能障害者や高次脳機能障害と理解されていない方々に対し、MSW が援助していく上で困るのではないかと、また、高次脳機能障害は脳外科疾患だけではなく、割に身近に存在するということ、つまり MSW 誰にでも関わる可能性があり、高次脳機能障害を持つ方が地域で生活していく限り、MSW の関わりとして

も今後様々な立場で、個々に対応していく可能性もあるということでもあります。それは今後、MSW が高次脳機能障害を理解し、どういう病気なのかを今一度知るということで、援助、アプローチの方法が一本化していくことで、安心して相談に行くことができるのではないのか。

MSW が今後これから先、高次脳機能障害を知ってもらうためのソーシャルアクションを起こすことが、MSW としての役目・役割を担っていくのではないのでしょうか。

まだ高次脳機能障害者への支援について考える部会も始まったばかりですが、将来 MSW として何らかのアクションにつながれば、ほかの MSW に対し、情報として伝えていくことになり、高次脳機能障害者への援助につながっていくものと信じていきたいものです。

平成13年度から高次脳機能障害者支援モデル事業が、今後2年延長にされたことに伴い、北海道大学医学部付属病院 リハ科 SW 小西さんと、今後高次脳機能障害者に関する情報について連携しながら、高次脳機能障害者への支援について考える部会としても、協力していく体制を作っていきたいと思っています。